ロシアのチョコレート

板東　洋三郎

「昨日帰りました。サンクトペテルブルグのお土産です」

そう言いながらTさんは、帰りがけの私に包みを渡してくれた。驚きもし、うれしくもあった。ロシアのお土産をもらうには初めてであったし、好物のチョコレートだったからである。

彼は、数年前に妻を亡くしてから、私がパートをしている特養の棟続木のケアハウスに、一人で住んでいる。彼女がロシア人の血を引いた人であったので、以前から亡妻の祖先の国を訪れたいと話していた。街並みの美しさや、帝国の全盛期に建てられた荘厳な数々の建物。本場の感動的なバレー「白鳥の湖」など、駐車場での立ち話には惜しい話だが、満たされた旅行であったようである。

その夜私は、ロシア正教の大聖堂が描かれているチョコレートの箱を手にしていた。しかし、それを見ながらも、私の脳裏には全く異なる情景が浮かんでいた。アマゾン川の下流の地域で、カカオを栽培する人々の質素な家と、その周りをはだしで犬や鶏を追いかけ走り回る、子供たちの様子。そして一つの悲しいできごとである。

そこは、私が住むことになった、アマゾン川の河口の都市、ブラジルのベレン市から南東へ二百五十キロメートルほどの地域である。私が宣教師として赴任して初めてその地域を訪れた日の夕方のことだ。舗装道路とは名ばかりの大きな穴だらけの道を、一人の人も見かけずにもうどのくらい走っていただろうか。道の両側には覆いかぶさるような大木が続く。日もかげりなんとなく心細くなり始めた矢先だ。前方に徒歩で行く人を見つけた。私はほっとした思いで、追いつくと車を止めてたずねた。

「すみません。次の町まであとどのくらいですか」

人のよさそうなその男は、担いでいた荷をおろし、

「そうだね。俺は歩きだから二十ほどだが、あんたは車だから五、六キロメートルくらいだな」

私は「えっ」と思ったが笑いをこらえて話を続けた。彼の家がまだ遠いと言うので、私は彼を乗せて先を急いだ。

大きな穴を右に左に避けながらしばらく走ると、彼の家がある道端の小さな集落に着いた。車を止めると、近くにいた大人や子供が数匹の犬について大勢私の周りにやってきた。

この億には日本人の入植地があるので、別段日本人が珍しいわけではないはずだ。すると、かの男が家に寄って行け、という。たいていの家の前には手作りの長椅子が置いてあって、一日の終わりに夕涼みをしながら、やコーヒーやマテ茶を回し飲みしながら、家族や隣人たちとたわいのない談笑をするのが彼らの日課であり楽しみでもある。気が付くと、私もそこに座っていた。

走行するうちに、妻が食事を作ったから食べていけ、というのでありがたくいただく。その頃はまだ電灯がなく、夜の照明は小さなカンテラだった。薄暗かったこともあり、よくわからなかったが、すすめられるまま食べた。生まれて初めての味ばかりだったが、空腹だったこともあり実にうまかった。何よりありがたかった。

食事が終わると男は、この先の道路を夜ひとりではしるのは危ないから泊って行け、と言い出した。これには私もいささか驚いた。しかし、先ほどから気になっているのだが、子どもがごろごろいるのに、今食事をしているかまどと大きなテーブルがある部屋と、もう一つの部屋しかないのだ。日本流に言えば、1DKということになる。そう言うと彼は、私が同意するのも待たずに、壁にかけてあったいくつもの丸めた布を下ろし始めた。初めて寝ることになったハンモックだった。あまり広くない部屋にそれらを上下、縦横に張り、子どもたちと私の五人んがそこで休んだ。私を迎えてくれた犬たちも、すぐ下で丸くなっている。

翌朝、夜も明けきらぬうちに起きた彼らについて、裏の井戸に顔を洗いに行く。太陽の暑い正午後に瞶めの休憩を取るので朝は早いらしい。そこで三、四メートルほどの面白い木を見た。おもちゃのラグビーボールのような赤褐色の実を直接、幹や太い枝につけた木だ。この実も初めは緑色で黄色、赤褐色、紫色へと変わっていくという。男の子が実を一つ取り、煉瓦で割り、私に差し出した。白い果肉に包ま

れた、アーモンドのような種がぎっしりつまっている。甘い香りがする。初めてのカカオだった。

この地域の人々はバナナ、コーヒー、最近日本でも知られるようになったアサイ、主食のマンディオカと呼ばれる木芋に加えて、カカオを栽培して整形を立てていた。粘土の水がめと、仕事の道具を肩に彼らが出かける。まだ薄暗い。私も出発する。今日の目的地は、百キロメートルほどさらに億の日本人入植地だ。前任者が、日本人の子弟のためにベレン市内に建てた学生寮で預かっている学生たちの保護者を訪問する。どういう訳か、舗装こそされていないが奥地の道路の方が格段にいい。ただ、行き交う車はすざまじい速度で走る。追い越されると、パチパチという砂利が車体やフロント・ガラスに当たる音を聞きながら、数秒間は何も見えない土煙の中を走ることになる。だから、日中でもライトをつけて走る。

この地域の主産物は長い間胡椒であった。戦前の日本人移住者がシンガポールから持ち出した、二〇本ほどの胡椒の苗のうち、途中でかれなかったわずか二本の苗から始まったという。しかし、かれらの努力に加え、欧米での需要の高まりと相まって、間もなく統治では「黒ダイヤ」と呼ばれるほどの「金のなる木」になった。しかし、戦中や病害のために一九七〇、八〇年代を酒井に多くの木が抜根され、その代わりにカカオが植えられ始めたのだ。とりわけ、基盤が十分でなかった戦後の移住者たちにとって、それ頼みの綱であった。

預かっている、中学生の兄と小学生の妹の保護者を訪ねた。母親と彼女の父親、つまり、子どもたちの祖父がいた。子供の父親はいなかった。その気配も感じられなかった。前任者が病気で急遽帰国したので引き継ぎもなく、両性たちの事情はわかっていなかった。気にはなったがそのことをわたしからたずねはしなかった。

しかし、しばらくして、少し打ち解けてきたころ、

「実は、子どもたちの父親のことですが、お聞きになっていますか」

と祖父が言った。私が知らないというと、うつむきかげんの、娘をいたわるように、話始めた。

その話によると、父親が現地人の労働者たちとカカオ畑で仕事をしていたとき、以前にも賃金のことで口論になったことのある男と言い合いになった。その男は、よその地方から最近この辺りにきた独り者だった。彼をよく知る人もいなかった。しかし、カカオの収穫の時期で人手が必要だった。彼はいつも他の労働者にも賃金

の不満を漏らしていたという。その日も何かの事で口論になり、父親の発した言葉に男が逆上し、他の者が止める間もなく、腰にしていた鉈で父親の首を一撃したというのだ。父親はおびただしい出欠のためほぼ即死し、男は労働者たちが取り押さえ警察に引き渡したが、その後の事を家族は何もしらない。

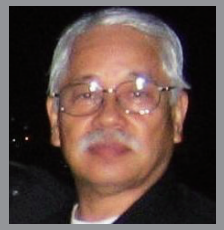
事件の翌年、夫を失った娘や孫たちを気遣い、定年ですでに退職していた祖父が、東北の県から、赤道直下のこの場所に移住してきた。その間に、小学生であった次男は、中国地方の父親の実家に引き取られた。父親が加害者の男に何を言ったのかはわからない。しかし祖父は、労働者たちは知っているけれども言わないでいるのだろうと思うと言う。現地の言葉や、人々の気質に習熟していない日本人が巻き込まれる事故や事件はまれではなかった時代のことだ。その後、父親の実家が分骨を望んだので、土葬した遺骨を掘り起して焼くことになり、私も立ち会った。

バレンタインデーに限らず、チョコレートはいつでも、もらった人の微笑みを誘う土産品のお気に入りトップテンに入っているようだ。どうやら、ロシアも例外ではないらしい。

しかし、その原料であるカカオが生産される環境は、それがやりとりされる世界とは、文字通り別世界である。カカオができるのは赤道をはさむ、南北緯二十度の範囲というから、どちらかというと貧しい地域だ。心が躍るようなきれいな箱や包装紙にくるまれた、おいしいチョコレートとはおおよそ無縁の人々によってその原料は供給されている。

カカオには三つの種類がある。アマゾンで栽培されるものも含めてその大部分は「フォラステイロ」という種類だ。この名の意味は「異邦人、さまよう者」だ。何か示唆的な名ではある。コートジボワールの貧しい農村から、アマゾン河沿岸の集落から、カカオが、腐ランドのチョコレートに変身し、恋人たちの思いや、人々の好意を代弁して心に届けるまで、それはどんな旅をしてきたのだろうか。

何気なく箱の裏を見た。「ベルギー製」と書いてあった。



板東　洋三郎

大阪生まれ、北海道育ち。（１９４３）
中央大学第２経済学部中退（１９６５）
ブラジルに単身移住（１９６７）
アドベンチスト大学神学部（ブラジル・サンパウロ）卒業（１９７４）
北米アンドリュース大学修士課程修了（１９８８）
元ブラジル宣教師
現在、特養のパート職員として介助や庭園の仕事をしています。
目下の趣味はエッセイを書くことと卓球とトレッキングです。